

教育目標		本校教育実践の蓄積を生かしつつ、新しい時代に生徒が未来社会を切り拓ひらくための資質・能力を一層確実に育成することを目指す。また、知識理解の質を更に高め、確かな学力を育成するとともに、豊かな心や健やかな体を育成する。						総合評価	
運営方針		<ul style="list-style-type: none"> ・新しい時代を逞しく生きる力を意識し、身につけるために探究的活動に力を注ぐ。 ・進路目標の実現のため、高大接続改革や新しい学力観が要求する資質・能力と、確かな学力を育成する。 ・社会の形成者として有為な人材となることを目指し、部活動を奨励するとともに、社会と繋がる活動を推進する。 							
○昨年度の成果と課題		本年度重点目標		具体的目標				B	
コロナ禍で在宅学習を余儀なくされた中、ICTを活用するなど工夫された授業が展開された。新学習指導要領実施に向けて探究的な学びにつながる授業改善を図る必要がある。例年とは違う方法で学校行事等を実施することができた。今後、生徒が登校できなくなるなど学習環境が変化しても、本校の教育活動が継続できるよう様々な想定をして備えたい。		探究活動に積極的に取り組ませる。		<ul style="list-style-type: none"> ・令和4年度からの総合的な探究の時間の準備を行う。 ・令和4年度からの理数探究の準備を行う。 ・すべての教科において探究活動への意識を高める。 					
		新しい授業に向けた改善を進める。		<ul style="list-style-type: none"> ・観点別評価を定着させる。 ・ICT機器などを積極的に活用し、生徒の授業理解が進む工夫を行う。 ・新学習指導要領が求める学力観を意識した授業改善を行う。 					
		進路指導の充実を図る。		<ul style="list-style-type: none"> ・より高い可能性にむけて妥協せず追求する意識を育てる。 ・3年生になるまでに進路実現に向けての意識づけを行う。 ・1人1人の努力に寄り添う指導を充実させる。 					
		豊かな人間性と人格の涵養に努める。		<ul style="list-style-type: none"> ・自分を大切にし、他者を思いやることの大切さを日常の中で気づかせる。 ・地域とのつながりを意識し、奉仕者精神を学ばせる。 					
		学校行事や部活動から学ぶ。		<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事を通じて、協働し工夫する態度と郡高への所属意識を高める。 ・部活動への積極的参加を推奨する。 ・より健康な心身を育むよう取り組む。 					
評価項目	具体的目標 (評価小目標)	具体的方策	評価指標	中間期(9月)		年度末(3月)			
				自己評価	進捗状況	自己評価	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
学習指導	観点別評価の定着への推進と授業内容の充実を図る。	観点別評価の定着を図るため、単元ごとや授業ごとの評価方法を研究し、考査に反映させる。	昨年度と比較して観点別評価をした機会が増えたと答えた職員が7割を超えればA、7割～5割ならB、5割～2割ならC、2割未満ならDとする。	-	観点別評価の導入を図るため、職員会議にて、今後の方針と具体的な実施手順について連絡し、各教科科目において評価項目の検討をお願いした。なお、教員アンケート実施後に自己評価を行う予定である。	B	『観点別評価の推進に向けて単元ごとや授業ごとの評価方法を研究し考査に反映させることができましたか。』という質問に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた教員はあわせて70%であり、多数の教員は考査に反映できたと考えられる。	観点別評価については、2学期に行った観点別評価の規準を振り返っていたが、来年度入学生へのシラバス、妥当な評価規準(ルーブリック)の作成を各教科お願いし、新教務内規の運用をお願いしたい。	観点別評価が令和4年度より導入されるので、引き続き評価方法の研究・定着をお願いする。
進路指導	将来の進路に関する意識向上	キャリア教育に関する講演会や大学説明会等を通して、常に自己の進路について考える機会を与え、意識の高揚を図る。	各進路関係行事において、事後アンケートを実施し、生徒の満足度が80%以上ならA、70%以上ならB、60%以上ならC、60%未満ならDとする。	-	10月実施予定の1年キャリア教育『Professionalsに学ぶ』および2年大学学部説明会が終了後の事後指導にて確認する。	A	生徒実態調査において、1年84.7%、2年86.4%が「有意義であった」との結果であった。自己の進路について考える大切な機会となった。	次年度も継続してこのような機会をもち、将来の目標を定め、日々の学習や生活に計画的に取り組めるよう指導を続けたい。	進路について考える機会を多く提供いただいた。今後も継続して行ってほしい。
	進路実現のためのきめ細かな指導	各種模擬試験の結果等を参考に、その分析を実施し、課題等の把握と、教科指導も含めた進路に関わる指導の方向性を確認する。また進路に関わる情報の収集に努め、的確に状況を把握する。	大学入学共通テスト7科目受験率による。70%以上ならA、60%以上ならB、50%以上ならC、50%以上未満ならDとする。	-	9月末の大学入学共通テスト出願状況をまとめてから確認する。	B	国公立大学出願を中心とした5教科7科目型の受験率は65%であった。生徒実態調査において1・2年次は70%以上の生徒が国公立大学を目指しているという結果が出ており、最後までその意識を持ちながら努力を続けるよう指導することが課題である。	将来に向けて計画的に努力することの大切さと共に、その具体的な方策を今まで以上に示し、達成できたかどうかまできめ細かに指導する必要がある。	進路達成にむけて生徒がモチベーションを保ち続けられる指導をお願いする。
生徒指導	自分から進んで挨拶のできる生徒を育てる。	学校生活のあらゆる場面で、先生や来校者に対して、積極的な挨拶の励行を促す。	2学期末の生徒実態調査の中での挨拶に関する項目を集計し、本校生が先生や来校者に積極的に挨拶をしていると思う生徒が80%以上ならA、70%以上ならB、60%以上ならC、60%未満ならDとする。	-	実態調査は2学期末ではあるが、毎日の登校状況を見ていると、礼節をわきまえている生徒が多く、各クラスやクラブでも細やかに指導されている様子がうかがえる。	A	2学期末の生徒実態調査では、87%の生徒が自ら挨拶をすることを心掛けており、先生方にご協力頂いている登校指導や生活委員による挨拶運動の成果が表れている。	挨拶に対して消極的な13%の生徒達の意識を変える取組みが今後の課題であり、部活動顧問や授業担当者からの指導を加えてより高い達成率を目指したい。	恥ずかしがらずに積極的に挨拶できるよう指導をお願いする。
特別活動	学校行事・部活動を通じた、豊かな人間性と人格の涵養。	学校行事、HR活動、部活動に積極的に取り組み、協働し、工夫する態度を高められる行事を企画・立案する。	生徒実態調査により、学校行事やHR活動、部活動を自主的・自発的にすすんで実践し、達成感を得る事ができたと回答した生徒が80%以上A、60%以上B、45%以上C、45%未満ならDとする。	-	1学期、コロナの影響が続く中で積極的に取り組む姿が見られ、新歓、選挙、総会、球技大会等の行事で今年通りの工夫した活動が行われている。生徒実態調査実施後に評価を行う予定である。	A	「生徒実態調査」の結果、「学校行事やHR活動、部活動を自主的・自発的にすすんで実践することができた」と回答した生徒が各学年90%を超えている。コロナ禍が続き、行事や部活動に様々な制約があった中、与えられた環境のなかで工夫をし、活力ある生活を送ることができている。	生徒の活力を生かしつつ、日程の変更や、アクシデントに臨機応変に対応できる行事運営を考えておく必要がある。また、形を変えてでもできる限り行事を実施することが生徒のモチベーションを保つためにも重要である。	コロナ禍ではあったが学校行事に前向きに取り組む生徒が多いのは評価できる。
人権教育	自他の権利を守り、お互いをかけがえのない存在として尊重していく態度や豊かな人間性の育成を目指した人権教育の充実。	自他の人権の擁護と尊重の意識を高め、人権感覚の涵養に努められるような人権学習の実施及び、人権問題に対して日常的に意識させる環境の形成。	各学年最終のアンケートにおいて、積極的に、または関心を持って人権ホームルームに取り組んだとする回答が80%以上の学年が、全学年ならA、2つの学年ならB、1つの学年のみではC、どの学年も達しなかった場合はD。	-	生徒アンケートはまだ実施されていないので評価は次回とする。1学期の人権HRでは、生徒が主体的に取り組めるように工夫を凝らしたHRを実施することができた。	A	各学年の人権ホームルームにおいて、生徒が主体的に活動し問題解決に向けて思考を深められるよう、工夫を凝らした展開ができた。2学期に実施した第三学年のアンケートでは、積極的に、または関心を持って人権ホームルームに取り組んだとする回答が96%であった。今後、様々な場面で確かな人権感覚を育めるよう取り組む必要がある。	人権ホームルームで、生徒が主体的に活動する取組を更に進め、多面的・多角的な理解や思考をとおして様々な人権問題を捉えることができる工夫をする。	人権意識の向上のため、様々なジャンルでの人権ホームルームや講演会をさらにすすめてほしい。

評価項目	具体的目標 (評価小目標)	具体的方策	評価指標	中間期(9月)		年度末(3月)			
				自己評価	進捗状況	自己評価	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
教育相談	相談に関する知識やスキルの共有	教職員対象の研修(ストレスマネジメント・ケース会議・事例検討等)を企画する。	研修後にアンケートを行い、その結果、「有効であった」と答えた教員の割合が60%以上ならA、40%以上ならB、30%以上ならC、30%未満ならDとする。	-	7月に「子どものSOSを受け止めるために」という研修を実施。研修後のアンケート(参加者の8割から回答を得た)の結果、すべて「有効であった」「概ね有効であった」という回答であった。よって、A評価としたい。	A	SCと相談部員の情報共有の場が、担任や学年主任も参加してケース会議の形になることも多く、生徒への適切な支援につながっている。今後もこのような相談に関する知識や情報を共有できる場を広げていきたい。	特別な支援や配慮を必要とする生徒について、教員間でより共通理解が進むような体制づくりや資料づくりについて取り組んでいきたい。	引き続き連絡会をもち、教員間の情報共有・共通理解をすすめていってほしい。
保健体育	生涯を通じて健康な生活が実践できる力の育成	「保健だより」を活用しながら、怪我・疾病予防など、健康への関心を高める。	生徒実態調査において、「保健だより」を読んで、『怪我・疾病予防などに取り組めた』が、60%以上ならA、40%以上ならB、20%以上ならC、20%未満ならDとする。	-	生徒実態調査がまだ終わっていないため自己評価は出せない状況です。	B	「怪我や疾病の予防に生かされた」と答えた生徒が全体で47.9%であった。昨年度よりやや減少した。「全く読んでいない」と答えた者は22.5%から25.6%で全体の1/4を超えてしまった。まず、読ませることからはじめ、意識を高めていく必要がある。	1・2年生は保健の授業で配布し話もしているが、時間を取ることが難しい時も多い。さらに読ませることを徹底し、自己健康管理ができるよう、興味関心を高めていくようにしなければならない。	「保健だより」は大切。読ませる機会を設定するとともに、内容を吟味する必要のあるのかもしれない。
	体力の向上を目指した活動の充実	体育に関する行事を実施し、それに向けて日々の体力の向上および活動の充実を目指す	生徒実態調査において「日々の生活を通じて自己の体力向上に努めている」が75%以上ならA、60%以上ならB、50%以上ならC、50%未満ならDとする。	-	生徒実態調査がまだ終わっていないため自己評価は出せない状況です。	A	「日々の生活を通して、自己の体力向上に努めている」と答えた生徒が、75.9%であった。「体力を高めたい」と考えている生徒が80.6%で体力向上を実践している生徒が大多数である。また、「体育行事に積極的に参加した」「参加した」と答えたは92.3%で、運動することへの意欲があると思われる。	行事だけでなく、日々の生活を通じて体力を高めることが、競技能力を高め、より体育行事も楽しみながら行うことができることに繋がる。何よりも健康寿命が延びて、老後の活動にもプラスになることを意識づけていけるよう努めていきたい。	体育行事に積極的に参加する生徒が多いことは評価できる。
文化図書	探究活動への意識向上、豊かな人間性の育成を目指した読書活動の推進	読書HR、ビブリオバトル、図書だより「共慶」、ポスター等の掲示などを通して、読書活動への意欲を高める。	ビブリオバトル後のアンケート及び生徒実態調査において、いろいろな読書啓発活動から、「読みたい本が見つけられた」「興味を持った本が見つけられた」と答えた生徒の割合が75%以上ならA、65%以上ならB、55%以上ならC、55%未満ならDとする。	-	1学期に読書HRを1回実施し、図書だより「共慶」を2回発行した。ポスター等の掲示は随時行っている。2学期以降、読書HR、ビブリオバトル、「共慶」発行等を行っていく。評価は、生徒実態調査後に行う。	B	「読みたい本が見つけられた」「興味を持った本が見つけられた」と答えた生徒の割合は、「共慶」で49.8%、ビブリオバトルで95.0%、全体で72.4%であった。ビブリオバトルは、例年通り好評であったが、「共慶」は昨年度より2.9%減少し、50%を切ってしまった。アンケート結果で、読まない生徒が増加してしまったことが原因の一つであると思われる。	まずは、「共慶」を読む生徒を増やさなければならない。話題の本や時事の本等、多くが興味を持てるような本を増やすなど内容を改善し、発行時期の工夫、回数の増加を行う。	読書習慣の確立のためさらに工夫をお願いする。
環境整備	生徒の自主的な活動による学校美化の向上	美化委員により、機会あるごとに「すすんで清掃・整理整頓」を生徒全員に呼びかけ推進する。また、各ホームルームや共同利用する場所の清掃状況を定期的に点検し、問題がある場所の清掃を強化し改善する。	生徒実態調査において、「清掃当番のとき、清掃活動にすすんで取り組んでいる」と答えた生徒の割合が、50%以上ならA、30%以上ならB、20%以上ならC、20%未満はDとする。	-	各クラスの美化委員が「すすんで掃除・整理整頓」を呼びかけ、積極性を高めようとしている。また、大掃除のたびに環境整備部や美化委員で清掃状況を点検し、問題があれば改善してもらっている。	B	掃除に「すすんで取り組んでいる」生徒は全体の44.9%。昨年比で3年生は向上し2年生は低下しているなど、学年によって差がある。「すすんで」と「おおむね」を合わせると96.3%となり、自己評価は高いが、掃除状況が良くない箇所も見受けられるので、積極的に掃除ができる生徒が一層増えるよう工夫をしていきたい。	美化委員で大掃除ごとに点検し、改善をしているが、掃除状況を見るために巡回すると、たまに不十分な箇所も見受けられるので、きれいな状況を維持するように、また、汚ければすすんで掃除するように、生徒にも監督者にもさらにこまめに呼びかけていきたい。	清掃状況は概して良好であるが、意識を高める活動を継続してほしい。
広報・情報	ホームページ、育友会関連連絡メール、学校案内、広報誌等、情報発信の充実	ホームページ、メールシステム、Google-Workspaceを活用し、保護者への行事の周知徹底を図り、育友会行事の参加者の増加と満足度を高める。	利用者、参加者に満足度アンケートを行い、「よかった」と答えた保護者の割合が60%以上ならA、50%以上ならB、40%以上ならC、40%未満はDとする。(事後アンケート)	B	学校案内、育友新聞、広報紙等の作成は例年通り実施。また、コロナ対策の為、育友会総会はHPとFormを利用した書面表決で開催し、保護者の回答率も91.5%と周知徹底できた。さらに、保護者アンケートの結果よりHPの閲覧率もコロナ禍以前の昨年より20.0%も上がっている。	B	育友会のWeb書面議決は、2年連続であるが効果的であった。保護者アンケートによる満足度の上昇は、HPや連絡メールの有益性を示している。また、生徒実態調査のHP閲覧率は、コロナ禍前より大きく上昇した。これは制約のある学校生活で情報収集にHPが役立っていると考えられる。今後、新1年生より始まるBYODに対応する必要がある。	保護者・生徒アンケートも、新1年生より始まるBYODによりICT機器の保有率、等の問題を解消すれば、Google-Workspace等のICT活用をさらに進めたい。今後、コロナ禍の状況が変動する中、学校活動の中止・変更が予測されるので、HP・R365等の情報発信で対応したいと考える。	保護者が学校のことをより知るため、中学生等への広報のため、HP更新は大切であるので引き続きお願いする。
探究	令和4年度からの総合的な探究の時間の準備を行う。	令和4年度の1年生の、1・2年次の探究学習の指導案を作成する。 令和4年度の2年生の、2年次の指導案を作成する。	左記の指導案の作成を100%達成した場合をAとする。85%ならB、70%ならC、60%ならDとする。	-	現在、令和4年度の1年生の指導案、ワークシート、教員用資料を作成済み。2年生の指導案は、3つの単元のうち、1つは作成済み、2つは検討中。令和4年度2年生は、3つの単元のうち、2つのワークシート、教員用資料は作成済み。1つは検討中。	A	現在、令和4年度の1年生の、3年間の指導案、ワークシート、教員用資料を作成済み。令和4年度2年生の、2年間の指導案も、基本的な案は作成済み。令和4年度3年生は、別立てで作成済み。課題は、来年度実施してみても、不具合や不足が出た場合に対応できるようにすること。	今年度中に出来ることは、あらかじめ考えて実行しておく。	次年度に備え、よく研究いただいた。
事務・管理	理化館建て替え工事(新理化館建設・現理化館取り壊し)を円滑に進める。	教育活動への影響をできるだけ少なくし、工事が円滑に進捗するよう、関係機関と調整を行う。	工事が工期通りに、問題なく円滑に支障なく進んでいけばA、調整可能ではあるが何か支障があればB、調整・改善は可能であるが教育活動に大きな支障があればC、工期が遅れるような大きな問題があればDとする。	A	毎週工程会議が開催され、本校の要望事項を伝えて調整ができる状況である。今のところ、順調に工事が進捗している。	A	工事は工期どおりに進んでおり、予定どおり3月17日をもって終了できる見込みである。旧理化館の取り壊しの際にはかなりの騒音が予想されたので、軽減のための対策措置をとるため各機関と調整を行った。	旧理化館の取り壊しでは、騒音が予想されたが、追加の防音措置でかなり軽減された。約1ヶ月間一部のクラスで教室移転をおこない、極力授業環境に影響のないよう努めた	良好である。旧理化館取り壊し及び新理化館建設にご足労いただいた。